

田村 明 ・ 旅（1）

田村千尋

プロローグ



時の経つは光陰のごとしである。田村明が 2010 年 1 月 25 日、永眠し、早 5 年が過ぎた。横浜田村塾の真矢正弘氏から「田村明の (&への) 旅」という演題で話を、とのご依頼があった。明自身の人生の旅、であり、彼が世界各国を巡った旅でもある。残したスライドやスケッチなど多くの記録をたぐって旅を共にしたい、という思いもあるが、弟である千尋から見た 80 年間の思い出、歴史をたどるといふ旅かもしれない、その趣旨を考え、快くお受けした。第一回の田村明研究会で「田村の家族」という題で話したので、此处では田村明に出来るだけ焦点をあて、やや分析的に明を語ってみたい。

田村明は 1926/7/25 から 2010/1/25、世をさるまで 83.5 年、人生の旅を良く生きた。戦前の軍事最優先の社会に生を受け、戦中の過酷で狂気に満ちた価値観の中をくぐり、戦争直後はやせ細った身に恐怖の食糧難を乗り越えた。その後の怒濤の発展にも奢ることなく、やがてバブル破裂を経験する。戦後、70 年間、戦乱を日本のこの地には見ず、思えば平和な時間が過ぎた。教育を受けている期間は殆どが混乱と窮乏、敗戦で社会全体が価値観の大逆転という事態を目の当たりにした。社会人になってからは平和の中、自分を見つめ直し、人を読み、社会の矛盾を一つ一つ問い直す時が訪れる。羽を一杯に広げ、友人や仲間達との語らいを楽しんだと思う。小学生の一年生になった写真から見ていただこう。父、幸太郎は



花水木 (DogWood) は我が家の家紋である。父は生まれてすぐ養子に行ったり、養父母が離婚して破談になったりした為、所謂、家系上では初代になる。父が亡くなったとき墓碑に「家紋」らしきものを、と母と義也で考えたのがこの花木である。とりわけ母は紅色の紅花水木が好きだった。後で調べたら島津公の家紋と知った。母は草月流の師範理事まで取得した人だが頂いた名前が「紅香」、その名前をととも気に入っていた。着物もどちらかというところ、比較的派手なピンク色を好み、可愛いおばあちゃんと言われるた事を喜んでいた。

さて、このセクションはこの写真を元にして加工し、様々な造形と色彩の variation を見ていただきながら明との拘わりのある田村家の風景を記録してみようと考えた。本題とは少し離れた視点からの思い出話である。

1925 年、日本市場にも登場した六桜社(小西六)のベストカメラを購入した。この写真には少年期に入った明がいる。目は一生懸命父親を見つめ輝いている。真一文字に口をとじ緊張している中に愛くるしいほほえみが宿る。写真のアングルは真っ正面、手が隠れていて上段の書籍を多く見せようとしている父の思いも伝わる。(本文の内容、進行は講演と異なる)

幼少期から青年時代（誕生から世界第二次大戦の終結まで）

1) 明、その名前の由来： 出生の時から苦難を背負った父が母、忠子との出会いで理想とする「クリスチャンホーム」が与えられる。生まれてくる子供達の名前には父の心

1921/8/7 忠幸（両親の名から一文字づつ）

1923/3/30 義也（旧約聖書、ヨシユア記）

1926/7/25 明（宇宙太、日月、本文中）

1930/7/11 千尋（女子願望）

がかいま見える。3人目の男の子に始めて自分の夢を伝えようとした。最初、考えた名前は「宇宙太（うちゅうた）」、だった。母親は”人にいじめられる”と直感、猛反対をする。母が経験した幼少期の苦痛を思い

だしてのことだろう*。父は、それならば、と「日月（うちゅう）」を提案した。これも反対され、結局、日月を一文字にした平凡な「明（あきら）」になったという。当時、明治天皇の最初の文字「明」から採って名付けられた人が多かったので一般にはそう見えるが父の主旨の中にあつた宏大な宇宙観は埋没してしまつた。しかし、明自身の心に父の思いは伝わっている。昨今、名付けの多様性、寛容さと比べるのも一興だろう。父は宇宙の事を考え、調べるのが好きだった。ハレー彗星が1910年に地球に接近した時「地球に空気の無くなる日」と言われたりした。父は21歳、世界的にも大きな話題で、その時の事を千尋に楽しそうに話してくれている。ミラノの天文台長、スキャパレリが火星には運河があり、高度な生物の存在を予想したり、H.G.ウエルスが「火星襲来」を出版し、人々の目を一気に地球の外に向けさせた時でもあつた。ロケット探索が行われる現代の状況と比べるのは意味無いが知識人の大関心事だった。

*福島県相馬中村にて生れる。母、忠子の父はキリスト教の開拓伝道牧師だった。村人達からなかなか受け入れられず、村の子供達からも忠子は恰好の虐めの対象者になった。石を投げられたり追いかけられたりしたと語る。



田村家では花水木が家紋になった。花卉の大きいこの花は紅色から白色までのグラデーションの変化が綺麗だなど思い、大きな正方形に色を広げると何とも言えず色の種類の豊富さに改めて驚かされたのである。これがきっかけで、どんな色だろう？色の抽出を楽しんだ。その中に形を変えてみよう。描き方を変えてみようと思つた。プログラミングの技術を利用しているうちに、だんだんアートっぽくなってきた。思いもよらない造形や色彩に出会う様になってくると。父母や兄たちに見せたい、評論を聞きたいと思うようになった。そんな感傷的な思いにもふけりながらやっていたら、ふと、そこに父や母が後ろから視てくれているように感じる時もある。人生のそこはかかない深みをたぐっている様な気もした。そういえば、これは30代初めの頃の経験だが、フグ毒、テトロドトキシンの構造決定が命題になり、世界の化学者達と競合することになった時のことだが、直前に亡くなった父が何だか後ろから支えてくれているような感覚が何度か訪れた。幸いこの研究は彼らに負けずに成果を上げることが出来た。2015年はあれから丁度、50年目になる。

明の幼少、青年期の周辺

戦争と病、死の恐怖との闘い

西暦	個人の環境変化	社会情勢
1926	誕生、(大森の蓮沼)	
1927	渋谷、高木町に転居	
1928	母の入院	
1929		世界大恐慌
1930	弟、千尋誕生	
1931	渋谷、上智に転居	
1933	青山師範付属小学校入学 母、玉成保母養成所通学	
1934	西荻窪、井荻に転居	
1936	青山、六丁目に転居	226 事件
1937	母、青山学院緑岡幼稚園の保母主任	日中戦争
1938	目黒、柿の木坂に転居	
1939	府立一中入学	
1941	中3の時、病で1年休学	世界第二次大戦
1942	父、転職、母、失職 忠幸、義也徴兵	
1944	旧制静岡高校入学(勤労働員)	
1945		敗戦

2) 年代毎の世相の変化を追って

明治後半から大正にかけては領土拡大を果たした日本が富国強兵を掲げて人々を駆り立てた時代である。一方、所謂、大正ロマンと言われる、一瞬の自由主義が日本にも生まれた。丁度、その時期に両親は結婚したことになる。田村幸太郎は内村鑑三の理念を体し、忠子は東北開拓伝道師の五女という両親だった。父は殆ど孤独の中に青春を送り、やっと理想の妻、忠子に出会えた。楽しい新婚時代だったのではなかろうか、しかし、世の中が次第に住みにくくなって行くのを感じ始めていた。父の勤め先、ナショナル金銭登録機はアメリカ企業、出来高払いでボーナスは無く、収入が不安定で苦しい生活だった、と母の話。姉たちの夫はそれぞれ大学出身で、比較的、高い身分であったのも比べられ、辛い要因だったようだ。結婚し、第二子の義也が生まれて間もなく、関東大震災で東京全土が

崩壊し、大変な経験をした。それから3年ほど経った1926年(大正15年)に明が誕生する。明の物心がつく頃、両親は最も経済的に切迫した生活になる。しかも、その矢先、母は入院する騒ぎ、母が居ないことがショックだったのか、突然、泣き叫んだりして大変だった。ある時からそれがパツパツ止まったという。茶飲み話に母が語ったことだ。



戦争中、明が近くの大岡山小学校で「鮭の缶詰が焼夷爆弾で焼かれ、整理するため近所の人達が集まっている」と言う情報を聞きつけてきた。早速、二人でそこに行ってみると何やらそれらしい人たちがグループに分かれて校庭の中を動き回っていた。或一団が我々の方にやってきて二人が立っていた校門の外に出て行きそうな雰囲気に見えた。明の指示でその一団に潜り込み、一所に作業を始めたのである。何時間くらい働いたか、やがて解散ということで班長らしき男が「これから皆に鮭缶を配る」という、所が、「その前に、この中にスパイが居る。おまえ等だ」と指をさされ青くなった、その上、明が隠しポケットに缶詰を忍ばせていたのを見つけられ、「おまえにはヤレン帰れ」と後ろを向いた明の尻を蹴飛ばした。妙に悔しい思いでジント来たが如何ともしがたかった。そして私には「スパイのおまえは半分だ」と言って6個ほど渡された。直ぐに明の後を追った。道すがら明は別のポケットから缶詰を4個ほど、かくし持っていたのにはびっくりした。奇妙に痛快だったが渋い思い出でもある。



1932年頃、明が小1、千尋は記憶にない世界だ。明は私が生まれて病院から人力車に乗って帰って来たときのことを覚えているという。彼は上の兄と弟との距離を非常に意識しながら過ごしていたような気がする。明は私にとって一番身近な兄であり、遊びの指導者であり、教育者であり、ライバルであった。それらは時の流れに薄霧がかかり、重なり合っ取りとめなく、ただただ懐かしいの一言になる。理屈っぽく考えれば兄達のいない人生は私にはあり得ない。幼い頃は母の奪い合いであった。小、中学時代は、教育者と生徒であった。社会に出たときは互いにその距離を測るすが薄れて行った。だが、両親の一人一人が去る度に、互いの思いの程の近さに驚きつつ抱き合っ悲しみを共にした。そして、社会での仕事を終えて互いに語るときには誠にかけがいのない友であり同志であることを知った。(視よはらから相睦みて共にをるは、いかに善く、いかに楽しきかな、詩編 133 編 1) 兄弟だから顔が似ているのは当然だが明と私は他の 2 人より似ている様に思う。そして「つむじ」が 3 つつあるのも同じ、忠幸、義也は 1 つずつ。面白いことに両親はふたりが 2 つずつだった。しかし、血液型は明は B 型、私は A 型だ。そして父は O 型、母は AB 型、理屈に合う。



もともと、鉄道が好きになったのはこれがきっかけだっ

日本が權益を拡大し、前線に独立部隊の関東軍を仕立てた。次第に暴走部隊に変身、1929年には満州事変が起きる。一方、脆弱な資本主義の構造、アメリカ的競争社会は、その仕組み故の世界大恐慌を引き起こし、世界中にその大波が打ち寄せた。日本では底の浅い弱い家庭の家計を直撃した。そんな中、1930年、弟、千尋が誕生する。明は乳幼児の弟を抱えている母をどの様に見たのだろうか、自分は「兄」になった、という喜びと世の中の変動に耐えている母を何となく感じている。明は恐らく「自分は我慢しなければならない」という感覚が芽生えたのではなかろうか。

両親は教育には熱心だった。忠幸、義也と二人を青山師範附属小学校に通わせ、明も同様にこの附属に入れた。母は男の子 4 人を抱え、このままでは生活が苦しくなるばかりだ。何かしなければならぬ。若い頃、祖父を助けて浦和教会で日曜学校の先生をしたりして、その頃、自分は教育者に向いている、と考えたこともあったという。「そう幼稚園の先生になろう」、父がフレーベルの幼児教育法を教える玉成保母養成所を見つけてくれる。こうして保母を目指すことになった。養成所のある西荻窪の井荻に引っ越し、万全の体制を敷いた。明は小学校二年生になり、逆に青山の附属小学校まで小一時間かけての通学が強いられた。

母の姉(操伯母)は兵頭家に嫁いだ。子供が男子ばかり 5 人、しかも下の 4 人は計画したように両家族が同い年だった。とても仲の良い従兄弟同士の付き合いをしてきた。夏休みには宇佐見や沼津に揃って避暑に行っ楽しく過ごした記憶がある。

明と同じ年の従兄弟は兵頭正義、正則中学から正義の父の故郷、愛媛に行き、旧制松山高校から京大医学部、外科から麻酔科に進み、東洋医学も取り入れたりして面白いジャンルを開拓した人である。兵頭、田村家で旧帝国大学に入ったのは明と正義だけだったし、二人は仲が良く、深い交流が続いた。大人になってからは医者という職業はかなり特殊な世界だから交流は次第に限定されたかもしれないが、二人が会えば物静かに話合っている姿は記憶に残るものだ。彼が旧制松山高校を受験するとき、柿の木坂の家に下宿し、私と一所の部屋で寝起きをしていたこともあった。医者と薬屋という間柄もあり、私も彼とは最後まで親しくつきあえた人だった。漫画を書くのがとても上手で、その道に行っても成功した人だろう。

娘のよう若者に混ざっての勉強が始まる。毎日、遅くまで養成所で勉強をした。あの頃の家
の夕食は淋しかったと思い出すように語る明、彼のマザーコンプレックスはこの頃の事
がトラウマになった、という推測も成り立つ。

この井萩にいた時、あの 226 事件が起きた。ラジオ放送が大きな機能を果たせた最初の
事件とも言われるが、JOAK が始まり 10 年目の事だった。大雪で母が高下駄を雪に取ら

戦時体制下の不条理(1941~1945)

- 1 天皇は現人神である
- 2 非国民レッテルと隣組相互監視体制
- 3 敵兵を殺して英雄になれ
- 4 捕虜になる前に自害せよ
- 5 神社、宮城では最敬礼せよ
- 6 ほしがりません、勝つまでは
- 7 神風特攻隊となり国に尽くせ
- 8 竹槍をもって一人でも敵を殺せ

れ、白足袋で帰宅した。わたしは母が何か大変な仕事をしている、という思いをハッキリもったのがこの時である。その頃、母は帰宅すると何時も私を強く抱きしめてくれていた、その日は玄関でヘタヘタと倒れ込み、上の兄達に支えられて家の中に入った。風呂を焚き、暖をとらせた事まで覚えている。父はその夜、さらに遅く帰宅した。バタバタとした家の中だけでなく、何か大変な事が起きている、という大人達の話し方、しかし、その 226 事件の意味が解つたの

は随分後のことである。暗黒の時代の予兆は皮肉なことに真っ白な雪の洗礼をうけて始まったのである。軍部の暴走は止まらない、1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件から中国への戦争へ、1941 年 12 月 8 日、取り返しのつかない世界第二次大戦へ突入した。明はその時、青春の 15 歳、翌年には忠幸、義也に相次いで出征命令の赤紙が来た。

この時代、青年達は戦争で死ぬか、結核で死ぬか、と追い込まれていた。今のような抗生物質はなく、完全に不治の病とされていたのである。彼らは発狂するように兵役を選ぶもの、反対に何としても生き延びよう、徴兵に抗して大量の醤油をのみ腎臓障害で兵役を逃れようとするものもいた。しかし、母の願いは「子供達を死なせたくない」に尽きた。食事時の祈りは一貫して「平和を望む」であり、息子達が「人を殺さないで帰ってこ



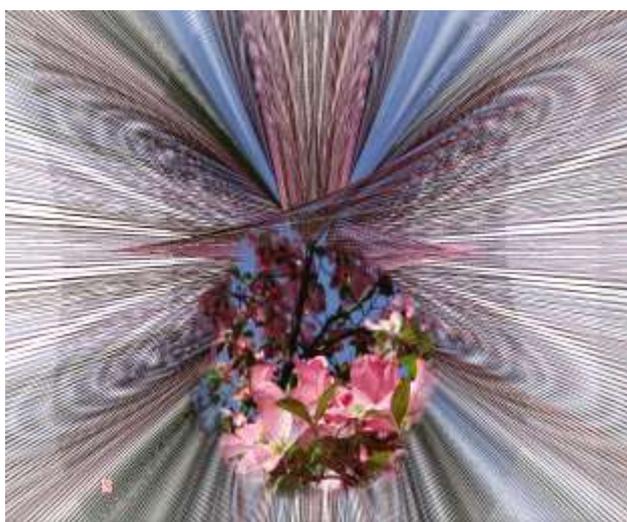
明は生活そのものはシンプルさを好んだ、所謂、華美な贅沢品、あるいは骨董品のようなものは買わなかった。しかし、実用的で必要なものはピシッと思い切りは良かった。非常に合理的な生活態度で一貫していた。殆ど「無駄」という言葉は彼には不要だったと思う。生まれてから数年間の苦しい生活が母を通して染みこむように伝わって居たのかも知れない。しばしば明が母に「千尋は贅沢だ」と告げ口していることがあったようだし、つまらない思い出の一つだが戦後随分経ってから、歯磨き粉がチューブ入りの練り歯磨きになり、私が歯を磨こうとブラシに練り歯磨きを載せようとするのを見かけた明がつける量が多すぎると言って文句をつけた。丁度、通りかかりの母に報告、母が「良いじゃないのその位」と言ってくれた。明は不服そうだった。ともかく節約を「むね」としていたのは間違いない。ちなみに田村家は皆あまり良い歯ではなかった。

られるように」であった。学校で先生は

「神社、宮城を通ったら拝礼をせよ」と説き、我が家では「汝わが顔の前に我の他何者をも神とすべからず（出エジプト記 20・3）」、神以外の拝礼禁止が求められた。明、共々、小さいときに神の存在を考えさせられた、と言うことは人生を生きていく為の最高の教育を受けたと両親に感謝したい。母が幼稚園で御真影最敬礼や宮城遥拝など、文部省の皇国教育を断固として拒否し、「ここはキリスト教を標榜する園です。たとえこの身が牢獄にはいったとしても」と語った、という。（『青山学院と平和のメッセージ』1998 p. 17 より）、母がああ時代にそのような毅然たる抵抗を貫いたことに感嘆する。

3) 知識、教養、運動、遊び、病：

3-1) 父からのメッセージ——我が家には望遠鏡、顕微鏡があった。普通の家ではあまり見かけないものである。父の仕事、ナショナル金銭登録機のセールスマンは当時、歩合制、時に多くの売り上げを達成して青年の頃の夢を実現しようと望遠鏡を購入した。丁度、火星が地球に大接近した時で父の思いは「自分の目で火星を見てみたい」だったのだろう。しかし「相談もしないでこんな高いものを」と母は爆発、大変な夫婦喧嘩をやったと母は話した。自立した母親を目指したのは不況という世情だけでなく、この事件がきっかけで「女性も独立しなければ」だったとも語っている。子供達にとっては後に秋の夜空をただ眺める事だけでなく望遠鏡で月や火星、土星、木星、金星などを見て遠い世界を想像しながら確かめると言う得難い体験をした。これも幼いときに味わった大変な教育だったと思う。父はまた大の書籍好きで、漱石、鴎外、子規、などの全集、円本といわれた世界文学、現代日本文学、日本児童文庫などの全集、岩波文庫、岩波全書が数百冊、専用の書棚があった。また内村鑑三や藤井武の全集など、英語が好きでウェブスターやあの革張りのブリタニカの百科事典まであった。何故か日本の百科事典はなく、また講談社の出世物語本はハッキリ避けていた。そして数百冊の英語の書籍があり、何人かの友人に「君のお父さん、学者？」と聞かれることも屢々だった。



私の友人の家に行くと大抵部屋が広々とし、全体に

戦争が終わったときは壊滅的な東京のマチに本屋は無く、図書館もなくなっていた。人々は斬新な思想の活字に飢えていた。しかし、自由にもは書けても出版するに紙はなく、印刷屋も多く焼かれてしまっていた。漸く不自由なく本が買えるようになったのはいつ頃からか、何と云っても本は知識の源泉だ。インターネット情報が簡単に手に入るようになって様子が変わってきた。

明は父と同様、本がこよなき友だった。自らもよく書いたが自分の字が人に読みづらい、と言う問題がワープロの出現で一気に解決した。気楽に原稿を起こすことが出来るようになったからである。ワープロの時代がどのくらい続いたか、電子機器とのお付き合いも10年以上あるだろう。自分も外に向け発信するがアマゾンなどを使ってやたらと本を買った。ある頃から別に70平方メートル程の部屋をかり、初めの頃は図書室と称して勉強部屋にしようとしていたが、離れていた為、やっぱり不便で結局、書庫になった。その部屋も本で完全に溢れていた。明が逝ってこの膨大な書籍、資料類の扱いに戸惑ったが当時、横浜市の仲原氏の計らいで横浜市市史資料室の方に全て寄贈することが出来た。

なに本がある家はなかったと記憶する。父はまた「書」を好み、戦時中でさえ、食事の後、毎日のように墨をすって新聞紙に何か文字を書いていた。子供達は殆ど近くの書道教室に通わされたが際だって字が上手なのは義也、明の文字は年を経る毎に読めない字になって行った。頭で思っていることを早く形(文字)にしようとするので手が間に合わないのではなにか、という人がいたが、あたっているような気がする。これは講演や人に話をするときにも言えることで、父が「明、もっと間を取って話さない」と良く言っていた。父の講演を聴いたことがあるが確かににその間を大事にしていた。徳川夢声から「間」を学び、お手本にしていた。時おり詩吟を談じ、機嫌の良いときは風呂上がりに尻を叩きながら長唄らしきものを詠ったこともあり、本質的には固有の日本人心を覗かせていた。しかし、母があまり好きでなかったのも、これをやる時は限られていた。父が若い頃はよく子供達をつれて近くの散歩や時に少し遠いハイキングに連れて行ってくれた。残念ながら末っ子の私には、小1の時、父が子供達4人をつれて京王線の高幡不動から野猿峠に行ったことが唯一の記憶だが、今は地図で見てもどこを歩いたのか解らない。思うほど峠らしき景色は目に浮かばないが何か父や兄弟達と一所に歩いたことが楽しかった。また科学博物館や国立博物館に行ったことや萬世橋の鉄道博物館にも連れて行ってもらったことも思い出である。兄たちは常に近辺にいながらその残像はない。一方、私はフッと父のことを考える。父たるべき父を持てなかった彼の若い頃の事を思いながら、「あるべき父になろうと努力している父」を想像し、ふっと目頭が熱くなる。博物館に連れて行こうとした思いは何だっただろうか宇宙を、世界を考えさせたかったのだろ。大事な父のメッセージだった。

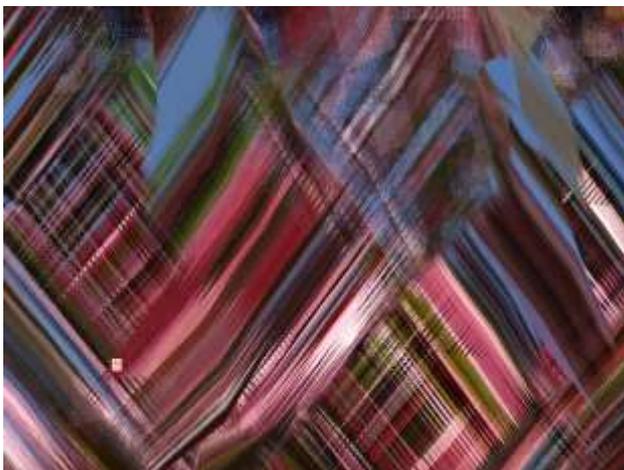
3-2) 母から、母の周辺からのメッセージ_____この項は祖母を語ることから始めたい。祖母の名前は「まち」なにか「まちづくり」元祖のような縁を感じるが、何代も続いた油問屋の娘だった。しかし、当時、石油に押されて家が破産、将来に不安を抱え、たまたま通りにあったキリスト教会に入る。そこで大きな癒しを得て熱心な信者になった。牧師パームは「まち」の才能に気づきミッションナリーの横浜共立女子で学ぶことを勧めたのである。



明の「東京っ子の原風景」に出てくる佐藤浩一さんの家のことだが彼は一人で行った様に書いているが私を連れて行ったのである。そこでバナナを食べさせてもらった。帰り道、明から「ママにバナナご馳走になったなんて言っちゃ駄目だぞ」と言われたが理由は言わなかった。翌日だったか明から母に「佐藤君の家に千尋と行った」と言う話をした。私も調子に乗って「鉄筋コンクリートの大きな家でびっくりした」と話したら「何かご馳走になったの」ときた。つい、つられて「バナナご馳走になった、とても美味しかった」と、明の命令をすっかり忘れてべらべら、母が驚いて明を叱りだし、「しまった」と思った。明はその後、私をなじる様なことはしなかった。その後、知ったことだが親戚の従兄弟達がバナナを食べ赤痢になり、亡くなった子が3人もいたので母や伯母たちの間では子供達に決して食べさせてはいけない果物の一つだったのである。この時は幸い疫痢にならずにすんだが確かに抗生物質のないあの時代、子供達は何時も危険と向き合っていたのだ、ということを出す。

祖母は喜んでそれを受け、まだ鉄道のない新潟から徒歩で三国峠を越えて表日本の土を踏んだ。どんな思いだっただろうか。日本の中で最も異国的な横浜で生活する。それも日常、英語だけで過ごさなければならない寮生活、その中身は「個」を重んじるアメリカ式の発想、価値観、そして生活の中にある衛生思想、この生活空間は全く革命的なものだったに違いない。母は祖母から生まれた時からこの一種の合理主義を受け継ぎ、さらに祖母と同じ横浜共立女子に学んで磨きをかけた。従って二代にわたって、この思想を受け継いだことになる。音楽を諦め、やがて或る紹介で結婚がきまるのだがその婚約者は数ヶ月後に結核で他界してしまう。母もこの時、深い嘆きを味わったと語った。一方、父方の父、祖父が事故死をして、父は生まれると直ぐ養子にやられてしまった。さらに青年期にその養父母が離婚してしまい、父は居場所を失ってしまう。若くして独立せざるを得なくなったのである。生活する上でも精神的にも大きな苦悩を負い、行き場を失い散策する。たまたまそこにあった村上キリスト教会に通い心の支えを得て自分を取り戻したのである。さらに教会で知己になった紅松氏に誘われ、上海の居留地で生活するという得難い経験をするようになる。そこは欧米型の生活空間があり、考え方があり、大きな影響を受けた。日本に帰国し、「きざ」と言われるような雰囲気醸し出していたと母は語る。しかし、しばらくして内村鑑三の集会に出席する様になってから父の表情も考え方も大飛躍を果たす。「人が変わったようだ」と母の両親にいわせ、二人は思わぬ経緯を経て結婚することになった。

改めてみると母からすればそこには舅は存在せず、純粹に祖母「まち」の思想と自分自身が身につけてきた人生観を初代の田村家で作り、育てて行く事になる。また父にしてもそれまで生みの親を見ず、育ての親にも裏切られ、今ここにいる妻の両親が始めて与えられた本当の父母のように慕わしく思える存在だった。事実、祖父、吉田亀太郎が病に倒れ病床に伏した時、父は実子のように寄り添い、祖父との会話、訪れる人との会話を記録した。一年後、編集代表者として追悼集を編集したのである。父の文面に「岳父は東北開拓伝道師として、葦原のくに行き、そこでの活動を通して東北を恋人のように思い岳父は何



同じ兄弟でも舌先というのは異なるものである。明は辛い食べ物が好きでライスカレーは彼の大好物の一つ、特にカレー専門店が一番辛いカレーをよく食べていた。店の名前を忘れたが明に連れられて地下鉄、桜木町駅のピオシティーで食べたカレーは辛かった。明は平気で食べていたが、こちらは最後、お腹が踊るような感じになって少し残した。

私の家内も辛いのが好きだが関西人特有の納豆嫌い、それでも納豆は栄養だからと、一生懸命、芥子をつけて納豆を食べている。ある時、家で明夫妻と一緒に食事をしたとき、家内が「明さんは納豆に芥子つけて食べられるんですね、千尋さんはつけないで食べるもので、それ聞いて明はびっくり「芥子つけないの？」と、私を見た。私は納豆には芥子はつけない、納豆の味でなくなり芥子の味になるから、が私の言い分である、

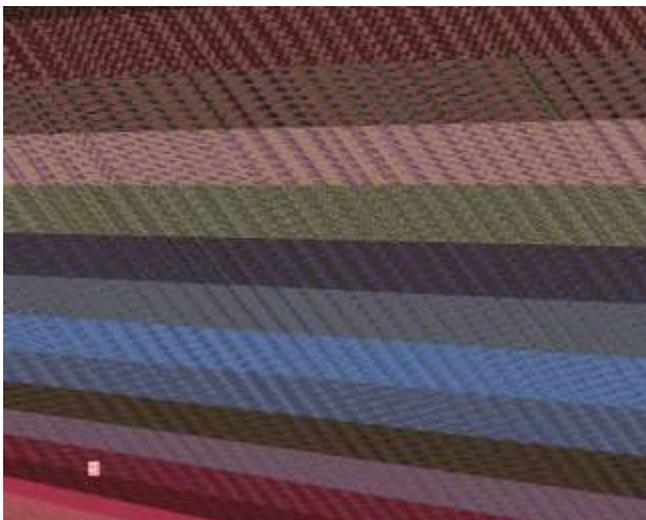


Rocked in the cradle of the deep,
I lay me down in peace to sleep;
Secure I rest upon the wave,
For Thou, O Lord, hath power to save.
I know Thou wilt not slight my call,
For Thou dost mark the sparrow's fall.
And calm and peaceful is my sleep,
Rocked in the cradle of the deep;
And calm and peaceful is my sleep,
Rocked in the cradle of the deep.

時も磁石のように北を向いていた」という趣旨の文がある。父は自分の故郷、村上(市)も東北の一部としたかったのだろう、地図では村上は東京の真北に位置する。

母は結婚したら「洗濯の出来るシーツを上下に敷いたものにしたい」と父に話し、それを実行した。私の少年時代、人様の家に行くと、寝床の多くは「どてら」が主流だったから大正の中頃は完全にそういう世界だったろう。食事も長円型のテーブルと椅子だった。明の大テーブル方式の原型かも知れない。決して豊かではない家庭状況だったがその時代では洋風の感覚の大きな家庭だったと思う。今の日本語はカタカナ英語で溢れているが戦前から母が時折口にする英語のフレーズは曖昧母音の (ə) が使い分けられ、日本語にはない音、如何にも英語らしい響きであることを感じていたものである。

我が家にピアノがあった。信伯母(後出)が使っていたアップライトのアメリカ製のお古だが母は時々、ランゲの「花の歌」やベートーベンの「エリーゼの為に」を弾いていた。もともと音楽が大好きで声楽家になることを夢見て上野の音楽学校(今の芸大)に進んだ。ミッションナリーのアメリカ人のサポートがあって出来た事だった。その人が事業に失敗して手を引いてしまい、音楽は断念せざるを得ないという経緯があった。両親が欧米の思想、色彩感覚に感化され、日本の演舞に拘わる文化や趣味は乏しくなった、というのは事実であろう。母の子供達へのララバイは **Rocked in the cradle of the deep** というバニラの香り

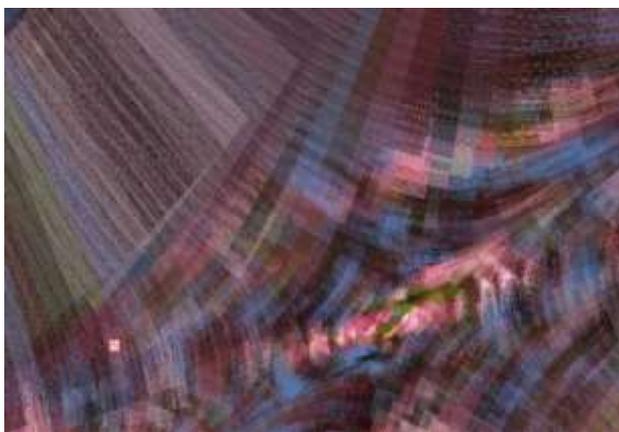


私は都立大学理学部化学科に入り家から10分もあれば教室に座れる距離だった。良く友人らが我が家に休憩にやってきましたり、予習したり、秋には柿を食べにやってきましたりしていた。卒業して何年も経った頃、その頃の話が出た時である。母の話になったとき、S君が「お母さんすごかったなー、4人の男の子を並べてギョングン何だかお説教して居るんだよ、あの頃、お兄さん達はもう社会人だろ?、我が家では見たことのない風景だったからすごい印象だった」という話である。勿論、こちらはそんなことしよっちゅうだったから何を言われていたのか覚えても居ない。母は幼稚園の先生をやったりして人の前に立つことには慣れていたし、まして息子達に話をするのは好きだったからお説教のように見えたのかも知れない。でも考えてみたら下の3人、義也、明、千尋は最後は学生たちに何か話を先生を経験した。明の授業、法政大学での最終講義は勿論聴いたが普通講義も一度聴いた事がある。サラサラとしてあまり気を持たせるようなことはなく、早口でもなかった。帰りにこの時もライスカレーを食べた。

がするようなメロディーで、明も懐かしげにこれを書いている。この横浜共立女子に学んだのは五人の娘のうち三人だが上の二人はアメリカに留学、中でも伯母の吉田信子は明治の終わりの頃、ここを卒業後、ニューヨークはジュリアード音楽院でピアノを学んだ。帰国後、アメリカで知己になったフローレンス ウェルスと一緒に日本に住むようになり、ウェルスは英語の教師、信伯母は先生をやって当時では珍しい西洋館（あえて古い言葉で）に住み、従兄弟達もみなこの不思議な外国人の「やかた」を別世界と感じていた。私などは永いこと信伯母が母のお姉さんとは知らなかったものである。

私が小学4年の時、ピアノをととても弾いてみたくなり、母に頼み、この伯母からピアノの手ほどきを受けることになった。所が義也、明もかねてからピアノが弾きたかったのだろう。三人の間で突然、ピアノの争奪戦が始まった。明は2ヶ月ほど、義也は半年程で止めてくれて、やっと千尋が一人でピアノが弾けるようになった。しかし、一年程して世界第二次大戦が勃発、ミスウェルスはアメリカに帰らず外国人の収容所に入所、信伯母は妹の道伯母の里の猪苗代に引っ越してしまった。もうピアノを楽しげ弾ける時代ではなくなったのである。非国民というレッテルを貼るバッシングが行われ、説教をする隣組の組長は「時節」と言う言葉を強調して人を裁き、時に密告する人もいた。多くの人は、自分を守るため喋らなくなる。さらに国の政策で人の思想や人生の背景まで探り、場合によっては問答無用の強権政治が行なわれるようになって行ったのである。何人ものリベラリスト、 коммуニストが牢に入れられ、脅しをかけられた。矢内原忠雄はその一人である。私の中学でも音楽のI先生は「この戦争は勝てない」と言い、それを生徒が密告、先生は投獄されてしまった。軍人達がマチを闊歩し、人々は歓呼して迎える人たちと、目を合わせないように下を向いて歩く人たちに分裂した。何ともおぞましい時代になっていったのである。

3-3) 運動と遊び（兄弟たちの関係、家庭、親族、社会状況を含めて） _____父は中学でテニスを覚え、ネット代わりの紐が見えなくなるまでやったものだと話していた。同時代の人々の中では背丈もあり、骨も丈夫な人だったのでそれなりのプレーヤーだったと思う。家庭をもってからも休みに仲間を見つけて時々、テニスを楽しんでいた。しかし、子供達を連れて行くことも教えることもしなかった。子供達にはあまり運動能力のある子が生まれなかったと感じていたのだろう。



明と一緒に仕事をした戦時中の思い出の一つ。家から500メートル位、離れた家に焼夷弾と爆弾が落ち、ひどい大きな音がして暫くすると砂が沢山降ってきたのである。夜中の2時頃で空襲警報が鳴った直ぐ後のことだった。明に指示されて火の見える方に二人で消火活動に走った。消火槽や井戸からバケツで水を汲み、リレー式に水を運び、捲く人達にわたすのだが、リレーの一員になった。消火槽は小さく、あつという間に空になって運ぶ水が無くなり、リレーを長くして遠くから運ぶ事になった。そうなると隣通しが遠くなって持ち歩いて運ばなければならなくなる。私がまだ肉体的に小さかったこともあり、ひどく難儀な作業だったことを思い出す。結局、焼夷弾が落ちた家は焼けたが隣への類焼は免れた。爆弾が落ちたところは幸いチョットした広場で被害は最小限だった。しかし、その後3月10日には東京の空を焦がすような焼夷弾攻撃を受けて全焼、この爆撃で何人かの友人が逃げ損なって亡くなってしまった。

明の幼少期は前節で書いたように、幼少期は極めて制限された経済事情の下にあった為、自転車は二人の兄には買い与えられたが自分には買ってもらえなかった。しかし、弟には買ってくれた。ここにも微妙に両親の経済力が反映していたのかも知れない。明はそんな不公平感に不満もいわず、母の優しい愛を感じていたようだ。明は「自分は我慢して行こう」という、「物わがりのよい子」だった。附属小学校の生徒達は比較的、裕福な家柄の子が多かった自転車は殆ど買い与えられていたから友達との差を強く感じながら育って行ったであろう。因みに、明が自転車に乗れるようになったのは旧制静高時代の18歳、戦争が終わってからだった。



左から、忠幸、明、千尋、義也。全員、丸坊主なのはあの時代の要請。明が発病し、休学になる。推定で1941年、後の景色で櫻の葉と服装の様子から季節は芽の出る早春の頃、この年の12月、世界第二次大戦が勃発した。東京の中心が焼け野原になった1945年3月10日の大空襲ではこちらの空が真っ赤になり、ざわざわといやな風が吹いた。田村家が、初めての自分の家が建ったのに全く変な家だった。このバルコニーは如何にも安っぽく、二階建てだが通し柱が無く、部屋が全部孤立していて繋がった座敷がない。他にも不満だらけだった。信頼していた人の紹介で作ったのに、まるで娼家のようにだと母はとても悔やんだ。両親が一番忙しいときだった為、全く任せきりだったという。バルコニーの下は雨漏りがひどく、戦後、しばらくして作業場のような部屋に改造した。丁度、母は草月流のお花の先生を始め、教室のような雰囲気になった。二面が東南を向いたガラス戸でとても明るい部屋になった。

事にする雰囲気になり、これも欧米型の家族が出来て行った理由であろう。後年、忠幸の話では一学年違いで迫ってくる義也が体力もあり手こずった、その下の明はまだベイビー、義也は独立心の強いかなりの個性派、兄弟が纏まるという状況にはならなかった、と義也が亡くなった時に語った事である。兄弟の遊びは殆ど室内で遊ぶことだし、兄たちは総じて読書好き、というタイプだった。それでも、幼い頃は忠幸が兄弟で遊べるゲームを何かと工夫し作ってくれた。その代表的なのがキビガラ相撲、今ならもっと豊富な素材があるだろうが当時は砂糖黍の軽い芯を3から4cmに切って画鋲を尻に刺し、重心を下げて力士に見立てる。土俵を作って、指ではじいて相手を倒したり、土俵から押し出して勝ち負けを決める遊びを作った。忠幸、明、千尋という構成で義也は参加せず、私はどうしても味噌っ粕でこの頃は忠幸と明が仲良く過ごしていた時代だった。少し大きくなって明が休学している時、作った野球ゲームは手のこんだもので、数個のサイコロを振って出た目数に

父はそれでも運動することには理解があった。野球のグローブや硬式のテニスラケットやボール、竹刀から弓まで家にあったのだが指南役はいない。子供同士が時折、キャッチボールをするくらいが背一杯だった。結局、あまり運動神経のある子は育たず、学校の徒競走でも一番になった子はいない。さらに私にとって兄たちは同学の遠距離通学、彼等の保護を受けることも出来ない。結局、兄弟達はみなそれぞれ独立していて一人一人が自分の世界を大

統計的な要素を加え、攻撃側と守備側のストライクやボール、打球の方向とスピード、野手のボール捕獲や捕殺など細かに判定していくもので実際のゲーム運びに近く、一試合、2時間位かけて楽しんだ。

4) 学業と病気と兵役

明が府立一中（現、日比谷高校）に合格した時、両親の喜びは大変なものだった。明はもともと学業でトップになることにはそれほど価値を感じていない。言わば80点主義だったが何処までやればその80点が取れるかを知っていたように思う。それも一つの才能だろう。青山師範の先生ご最良だったクラスでトップのS君も府立一中を受け、落ちてしまった。その先生から「田村君は運が良いんだね」と「運」にされてしまった、と笑った。反対に義也は一つ興味が沸くとそれに集中してしまい、全体を見ることを忘れ、昔から時間が足りない人だった。私もそんな傾向がある。明の場合、その後も結果を出して行く事で自分自身への自信になっていったのだと思う。余った時間はフルに遊びを含めて自分の興味あるものを探し回り、視野を広げることに専念していたのである。私にとって明は常時、遊びの指南役だった。

中学3年の時、肺逡巡と診断され、一年休学を余儀なくされる。今のような菌の培養による診断が出来ず、単に、X線写真で影が多い、という事だが、当時は結核の一手手前と考えられていた。これにはまた母が驚いた。結核菌は空気感染する最大の難病だったし、多くの若者達がこの病で死亡していたのである。家族全員に伝染して「肺病一家」という名がついた家もあり、非常に恐れられていた。母は明を家の中で隔離するような寝床の配置を実行し、また夏休みになると空気の綺麗なところに連れて行き回復を図った。この段階で私は完全に母から引き離されてしまった。それも理由は話されていないから何が何だかわからないまま、末っ子の甘えが突然、許されなくなったのである。私には大なる不満な日々になった。期待と可能性を秘めたこの三男坊に両親は背一杯の回復努力を払い、甲斐あって一年経つと肺逡巡の「影」は消え、復学する事が出来たのである。



不思議なもので随分長い時間一緒に生活していた幼い頃の思い出は殆どが断片的でストーリーにならない。しかも一生懸命思い出してみても何故そこにその人がいたのか解らない。夢といえばまさに夢のような世界である。とりわけ自分の存在に気がつき周囲の人々がなにかと関わり合いがあることを自覚したときの思い出は実に他愛ない。明の存在をフワッとした思い出で綴るとそこに誰かが居る。手を出してくる。何故だか知らないけれど一生懸命払いのけようとする。もう一つの風景は明が一生懸命ご飯を食べている。朝食だ。海苔一枚とタクアンに味噌汁である。明は「これで3膳食べられる」と言っている。我が家の米は七分づきだった。栄養学的に見て、あの頃の貧しい食事の中、白米でなくて良かったと思う

出来たのである。この病の休息は明にとって無駄ではなかった。即ち、病は兵役回避に有効だろうと思えたこと、その病を克服した自信を獲得した事、その間に勉強の取り組み方、要領に発見をしたことである。さらに付け加えるなら母との濃密な関係が確立したことも大満足の一年だったと思う。心に余裕が出来た明は中学4年生で「飛び級制度」で旧制静岡高校(理甲)に合格、言わば休学の遅れを取り戻したのである。中国との戦争が次第に泥沼化し、徴兵される若者達は増えていく。徴兵制度が国家の存立に拘わることになるのは第二次世界大戦への突入時がそのピークとなる。旧制の中学には配属将校が配備され、「天皇のために命を捧げよ、それが愛国心」だと説いた。この言葉は若者の心に住み込み、純粋な者ほど幼年学校や、海兵を目指し多くの体格の良い頭脳明晰な若者達が戦場の花と散った。佐世保出身のある先輩が「旧制中学の多くの友人が佐世保で招かれて軍艦に乗せられ、感激して兵学校を志願、死んでいった」と話した。

5) 世界第二次大戦の終結、敗戦

戦争が終わったとき、明は19歳、私は15歳だった。明は青春のまっただ中、私は入り口に立っていた。明にとって、このタイミングはギリギリ、病み上がりの意味もあって戦場には立たないまでも、時間に猶予のない兵役予備軍だった。この戦争は兵隊にならなくても焼夷弾、爆弾、そして原子爆弾で人たちのことを思うと堪らないがこの戦争で多くの命が失われ、家族を失い、家を失い、財産を失った者達であふれた事を忘れることは出来ない。9月には義也は帰還したが忠幸はまだスマトラで帰還船を待っていた。暮れのクリスマス家庭集会を開き父の祈りは「忠幸、義也が人を殺めることなく戦争が終わり、感謝いたします」と神に感謝した。親戚の中では四人の兵隊が出征したが誰も第一線の戦場に立つ事なく、人を殺すこともなく、死ぬものも出なかった。奇蹟のような時の流れであった。



我々の頃は受験勉強に所謂、塾に行ったり、家庭教師に見てもらったりする人は限られた人しか許されなかった。多くは受験用の本を買って独りで勉強し、受験するのが大部分だった。明は3年で休学した時、私の中学(青山学院中学部)のS先生に数学だけ見もらった。その先生がよかったのか、何かコツのようなものを掴んだと言っていた。確かに数学は「ものの考え方」だからS先生の一言で何だか全体が急に見えてくるような事があったのかも知れない。話題から少し外れるが、明は結構、人のこともよく見ていた。義也から譲り受けた参考書はやたら赤線が引かれていて、何処がポイントだかが解らなくなるような勉強の仕方、と評した。義也が旧制山形高校を受け、二度失敗、結局、慶応に行ったときの話である。私は数学があまり良く分からないと母に訴え、明に面倒を見てもえ、という事になった。非常にわかりやすく説明してくれた。何回か見もらったある時、母が「どうなの千尋は」と明に聞くと「だいたい解ってんじゃないの」ということになって家庭内家庭教師は終わった。明はあの頃から問題の本質を見抜く力がとてもある人だ、と思ったものである。

6) 国敗れて山河あり、心の問題を青春時代に学んだことの価値



旧制静高3年生(左から細田、中村、高橋、田村)、戦争で死ななくてすむ、青春のまっただ中にある。恒常的に続いた緊張感、戦争による死から解放され、それぞれの心の中にある安堵感が顔に出ているように見える。だが誰も太った感じの青年は居ない。明も顎が少し痩せている、ようで痛々しさも感じられる。ただ、髪の毛はふさふさとして青年らしい。旧制高校の学生は所謂バンカラ(ハイカラの反語的表現)が象徴、ドタンとしたマントに高下駄を履いて寮歌を歌って道を闊歩していた。

日本の政府が崩壊しアメリカ軍の法のもとに日々が始まった。多くの人々にとって、それがどんな事態であるのか解らないのは当然である。母方のある姉家族は3人の娘をもち、「東京に居てはアメリカ兵達に何をされるか解らない」といって彼等が上陸する前に田舎に引っ越してしまった。戦争に明け暮れた日本の軍隊を知っていた人々には兵隊達が占領地でまさにどんな無法な行為をしていたかを見ていたからだろうか。その裏返しに考えた行動なのだろう。思えば歴史上、人間の戦争史の中でこれほど秩序ある戦後処理はあっただろうか。それにしても、

戦争が終り大いなる安堵はあったが、その年の秋から冬への一日一日は恐ろしい空腹との闘いが始まった。野草のヒメジオンやハルジオンはもとより、口に出来るものは何でも食べた。しかし、冬になるとそれらも枯れて無くなる。この時、明は19歳、旧制高校2年、当時、戦争遂行のため若者をなるべく早く戦場に送るため旧制高校の学業時間を3年から2年に短縮されていた。翌年の大学受験を失敗すると直ちに兵役にかり出される状況だった。まさに絶妙なタイミングで戦争が終ったのである。兵役からの解放が如何に嬉しいことだったか計り知れない。学校は9月には新しい学期が始まるが、一体、どういう教育の基本理念を持って学問をするのだろうか。それまで国の政策に同調し、国体を詠って迎合していた思想家はさすがに教育の現場から去っていった。

明の心は躍った。田村家に染みついていた思想、とりわけ母が「自由と自覚」「民主主義と独立心」と語っていた言葉が目の前にやってきた。その意味を、それこそ自由に自分の全身で学べる時が来た、と感じていた。静高の繰り上げ制度は敗戦で解消され、次年度は最後の三年生になる。仰秀寮にも入寮できた。それぞれの青春が平和の中に訪れた。自分たちの楽しみを見つけ出そう。明は演劇活動を開始、演出家を任じて何人かの後輩達を指揮、まさに青春の最後の年を爆発させた。この話、実は田村家のクリスマスでの明の「一年を振り返っての感想」として披露されたものだが、その時の事が本当に楽しかったのだろう「演出家になるのも良いな、自分がやりたい仕事の一つかも知れない」と言っていた。

この頃のことを自分のことを振り返りながら明との距離を考えてみよう。私は15歳、青年の入り口、判断力も未熟だったが、ともかく、毎日の空襲から解放され、戦争で死ななくてすむ、助かった、と思った。何の為の戦争だったのか、軍国主義という一括りの言葉で解ったような顔をするわけにはいかない。戦争が終わったとき宮城の前で十人以上の人

が自害した。絶対権を持つ天皇の命令に「忠節」という言葉で自らを縛り、その命令即ち「アメリカに勝て」を完成出来なかった事を詫びて「死」を選んだという。両親が語っていた「戦争の無意味さ」が心にしみる。

公職追放にあった矢内原忠雄が東京大学に復権し、目黒区中根町にある今井館で毎日曜日、聖書集会を始めるというアナウンスがあり、我が家はこぞってその集会に参加するようになった。矢内原忠雄の話し方は淡々と平坦で、内容も少年の私には難しかった。基本は聖書の内容を様々な角度から論じ、理解するための注解講義だが毎週、聞いている中にだんだんとその「心」や「生きる」の意味を考えるようになったと様に思う。丁度、大人になる過程とも同期していた事もあるだろう。明も多少時間は異なるが同様だろう。思えば、両親の信仰への態度が原動力である。彼等の力を四人の男の子達は完全に信服していた。戦争中のあの平和への闘いを語り続け、乗り越えてきた実態を見てきた。厳しい世の中、社会での親子の間に強い信頼関係が確立していた。



明の青年期までの印象を漢字 25 文字で纏めた。中心に近いほど彼の頭の中はこの概念、あるいは実体が支配していたと見る。(千尋から見た)

生	書	学	恐	苦
喜	食	父	見	病
話	兄	母	弟	愛
思	遊	戚	聞	労
友	楽	読	怖	戦

戦後直ぐ (1946)、写真が撮れる人はなかなか居なかった。当時、アメリカの軍人達がコダックのフィルムを流してくれたのが民間での唯一の手段だったと思う。小川氏が撮影してくれた貴重なものである。旧制静高の仰秀寮の明の部屋から外を眺めている。やや遠くを見て、何を思っているのだろうか、19歳の唯一の写真であろう。

明の頭の中はまさしく母の一文字で溢れていた。但し、特に男の子はマザコン的要素は誰にもある。とりわけ、明の場合は、物心がつく頃、厳しい生活環境だったので、必死に生き抜こうしていた母親像がトラウマのように住み着いたのではなかろうか。全体として見ると、幼い頃は身内の人々が周辺にいる。そして五感に触れるもの、生きるに必要なもの、人間的な欲求を求めるものが外殻にある。大多数の人はこの25文字が重要な要素であろう

ある時、義也、明、千尋で「小さい頃の住み家に行ってみよう」と計画、渋谷の高木町、上智、青山を訪れた。義也、明は坂の具合などから家の位置を確認していた。

義也は「やっぱりここだ」と見定めると懐かしそうに写真を撮りまくった。千尋はハッキリ記憶にあるのは青山だけだった。

